



Part 1



1787年、時は江戸時代。相模の国足柄上郡栢山村、現在の神奈川県小田原市に百姓である父、利右衛門、母よしの間に長男として生まれたのが金次郎、後の二宮尊徳である。

「二宮金次郎」と言えば、学校の校庭の隅に薪を背負い、本を読む造像が思い浮かぶのでは。最近、歩きスマホが問題となり、どこかに撤去された様ですが歩道を歩いても車が突っ込んでくる物騒な時代ですから。

しかし栃木県の小学校では立像に代えて薪を背負い、切株に腰を下ろし、本を読む座像が建てられています。何故、そこまでして造像を建てる必要があるのかと思われるでしょうが、栃木県には理由があるのです。

さて、父は養父から13石の田畑と大きな家を受け継ぎ、金次郎が生まれた当時は暮しも豊かでありました。しかし父親は人から頼まれると断れない性格で散財を重ね、金次郎が5歳の時、暴風雨で酒匂川の堤が決壊し、田畑も家も見ると流されてしまいました。数年かかって荒れた田畑は復旧したが借金を抱え、家計は苦しくなっていました。

金次郎は病弱の父に代わって勤労奉仕に出ますが12歳という年齢がゆえ、働きが足りないと憂い、夜に草鞋を作って村人に配り、働きの足らずを補いました。

14歳の時、父がこの世を去り、母と幼い二人の弟たち、一家四人の生計を立てるために朝は薪刈り、夜は草鞋作りと働き、好きな本は薪を担ぎながらも読みました。2年後、母も無理が祟り、まだ幼い弟達を残して亡くなり、弟達は母の実家に預けられ、金次郎は叔父、萬兵衛の家に身を寄せることになりました。この年、またもや酒匂川が豪雨で溢れ、全てを流出してしまい、そんな中でも身を粉にして働き、夜は勉学に励みました。

しかしケチな叔父、萬兵衛は夜に読書をするを「燈油の無駄使い」と嫌い、「百姓には勉学は要らない」と罵られました。堤防に菜種を植えて、その菜種から菜種油を取って燈油にしました。また田植えの際に余って捨てられた苗で荒地を耕し、米1俵の収穫を得ました。

その翌年には5俵を得て、更にその翌年には20俵を得るまでになりました。尊徳の教えに『積小為大』小さな努力の積み重ねが、やがて大きな収穫や発展に結びつく。小事を疎かにして、大事を成すことはできないという教えです。

また18歳の時、百姓にしては珍しく頭の良さと学問好きに感服した和尚が出家を勧めました。「お前が出家すれば、この寺をお前に譲る、お前は百姓で朽ちるには惜しい」と、しかしすぐに断りました。「和尚さん、折角ですが、それはご免です、『百姓で朽ちる』という、その言葉が私には気に喰いません、百姓になることは朽ちることではありません、百姓くらい立派な仕事はないと思っています。私が学問をするのは立派な百姓になるためです」この百姓魂こそ、金次郎の一生を貫いたものでありました。



来週に続く。